インタビュー

人がつながるしくみをつくる

コミュニティデザイナー

山崎 亮

インタビュアー

堀脇純子

奈良県医療福祉生協
理事

やまざき・りょう

1973年、愛知県生まれ。大阪府立大学農学部（緑地計画工学専攻）卒業。メルボルン工科大学環境デザイン学部（ランドスケープアーキテクチュア専攻）留学、大阪府立大学大学院環境デザイン学部（地域生態工学専攻）修了。2005年にStudio-Lを設立。地域の課題を、地域に住む人たちが解決するためのコミュニティデザインに携わる。まちづくりのワークショップ、住民参加型の総合計画づくりに関するプロジェクトに多数関与。「海土町総合振興計画（島根県）」「マルヤガーデンズ（鹿児島県）」「震災+design」でグッドデザイン賞、「こどものシアワセをカタチにする」でキッズデザイン賞、「いえしまプロジェクト」でオーライ！ニッポン大賞審査委員会長賞を受賞。現在、京都造形芸術大学教授。主な著書に「コミュニティデザイン 人がつながるしくみをつくる」（学芸出版社）、「都市環境デザインの仕事」（学芸出版社／共著）、「震災のためにデザインは何が可能か」（NTT出版／共著）など。

コミュニティデザインという仕事

堀脇　山崎さんの著書「コミュニティデザイン 人がつながるしくみをつくる」を読ませていただきました。「人のつながり」をデザインする「コミュニティデザイン」という言葉は、今回初めて知りました。耳慣れない言葉ですが、どんなお仕事なのでしょうか。

山崎　コミュニティというのは、人の集まりです。地域であったり、学校や企業などもひとつのコミュニティです。人が集まって何か活動しようとしたり、共にくらしていこうとする時に、いろんな課題が出てきます。地域でいうと、限界集落や商店街に元気がないという問題もありますね。そういうコミュニティの人たちが抱えている課題を、そのコミュニティの構成員の人たち自身で乗り越えていくためのお手伝いをする。これを「コミュニティデザイン」と呼んでいます。地域の人々の力を引き出し、良質な人のつながりをつくる仕事ともいえます。

堀脇　鹿児島で、大手百貨店が撤退した後の商業施設に、地域のコミュニティ活動ができる場所をつくられていますね。商業空間にコミュニティの活動を組み込むことで、テナント、コミュニティ、利用客、そしてまちをつなげ、大いににぎわう買い物集会所として生まれ変わらせました。山崎さんは、「人がつながるしくみ」を設計しているわけですね。

「子ども笠岡諸島振興計画」

堀脇　本誌の今月号特集記事で取り上げている「子ども笠岡諸島振興計画」にも、山崎さんはかかわっていらっしゃいますね。7つの島からなる笠岡諸島には少子高齢化、島内・各島間の交流の少なさなどの課題があり、山崎さんはこの島の持続可能な運営、まちづくり、住民のやる気を醸成するためのしくみづくりにとりくまれました。

山崎　笠岡諸島で総合振興計画をつくるにあたり、最初にやったことは生活者へのヒアリングです。

堀脇　やはり徹底したヒアリングから入られるんですね。

山崎　そうですね。まずは地域に住んでいる人たちが何をやっている時が楽しいのか、今の生活で困っていることは何なのか、まち全体の魅力と悩みはどこにあるのかなどを聞いていきます。その中に、いろんな発見があるんですね。徹底的にヒアリングして、このまちはこの方向性でやっていくと面白いかもしれないということを探し出しています。

堀脇　地域の特徴や課題を把握するだけでなく、地域の人たちとの信頼関係をつくる上でもヒアリングは重要ですね。

山崎　笠岡諸島の大人たちにヒアリングすると、島の将来に不安を感じている一方で、「隣の島とは協力できない」「仕事が忙しいので、まちづくり活動の参加は難しい」など、住民参加の計画を策定するには不利な言葉がほとんどでした。そこで、子どもたちといっしょに計画をつくろうと考えました。まちの良い所・悪い所を出し合い、地域の良いところを活かして、地域の課題を解決していく計画を子どもたちみんなでつくりました。子どもの目線でつくった計画を、大人たちに実行してもらえるように行政の総合計画の中に入り込む形で提案しました。

　島には高校がないため、中

学校を卒業した子どもたちは島を離れることになります。島のことをよく知る機会を得た子どもたちは、将来的に島に帰ってきたいといっていました。でも、万が一、大人が子どもの提案を実行に移そうとしない場合は、「島に帰ってくるつもりはない」とも。つまり、脅しをかけたんです。すると、頑なに「まちづくりはやれない」といっていた大人たちが、話し合いを始めたんです。これはすごくうれしかったですね。公民館の活用ワークショップとか、放置された廃校をどう使うかなど、大人たちが真剣に話し始めたんです。

「子ども笠岡諸島振興計画」をもとに作成された冊子

堀脇　子どもたちの力が起爆剤になり、地域が次のステージにすすんだ感じですね。（詳しくは、7頁からの特集『子どもが「帰ってきたい」島をつくろう』をご覧ください）

物をつくらないデザイン

堀脇　山崎さんは当初、「ランドスケープデザイナー」として公園などハードの設計をされていました。それが「コミュニティデザイン」というソフトのデザインに移行されたきっかけは何だったのでしょう。

山崎　きっかけのひとつは、阪神淡路大震災ですね。当時、僕は学生で、都市計画を学んでいました。震災直後に現地に入り、神戸市の腕章を巻いて被災地を踏査しました。僕が担当した住吉区は、見渡す限り全壊状態でした。暗たんたる気持ちで川沿いを歩いていると、そこに被災者たちが集まって、励まし合いながら、これからどうやって生きていくかを話し合っていました。ハードとしての建物はほとんど壊れていたのに、人のつながりがしっかり残っていた。救われた気持ちでした。非常時だけでなく、平常時からこうした人のつながりがあった方がいいのではと思ったのが、ハードからソフトのデザインに向かうきっかけです。

　1995年の阪神淡路大震災、そして2011年の東日本大震災があって、カネとモノがあれば豊かな生活が送れると信じられる時代ではなくなった。時代が大きく転機しているのではないでしょうか。信頼できる地域に住むとか、人のつながりを大切にするとか、ハードではない部分をこれからはデザインしていかないと、現代的な幸せや豊かさにつながらないのでは、と思います。

　デザインというのは、人の生活を豊かにする行為であるといわれています。だから、カネやモノがたくさんあれば豊かだという時代は、豪華絢爛で見栄えがよいものをデザインすることがデザイナーの仕事でした。それが今は、カネやモノ以外に価値を見出そうという時代認識が広がっているように思います。デザインの仕事はみんなの幸せや豊かさをつくることですから、物をつくらないデザインがあってもいいのではないかと思ったんです。

地縁型とテーマ型のコミュニティ

堀脇　私たち医療福祉生協

は、これまでコミュニティデザインという発想が弱く、活動に行き詰まっている部分もあるんです。生協の活動は、根本的に「人と人のつながり」です。人のつながりをどのようにうまくデザインしていくかが、医療福祉生協の大きな課題です。コミュニティは自然発生的にできるものではなく、意識的に地域とかかわってデザインしていくものだという発想が必要なんですね。

山崎　コミュニティを研究したアメリカの社会学者マッキーバー（1882～1970）は、「コミュニティをつくるのは難しい」といっています。彼には、コミュニティをデザインするという発想はないんですね。でも、コミュニティとは別に、目的意識を持って何かをやっていこうとする集合体「アソシエーション」はつくり出せるといっています。例えば、自然保護の団体をつくったり、一人ぼっちをなくす助け合いの会をつくったり、そうしたアソシエーションをつくることはできる。地域の中にアソシエーションをいっぱいつくっていけば、みんなが相互に知り合って、「私たちは仲間だよね」というコミュニティ意識なるものが醸成されてくる。人間がつくることができるのは、コミュニティではなくアソシエーションだといういい方をしているんですね。

堀脇　日本でコミュニティという言葉が注目されるようになったのは、1970年くらいですよね。

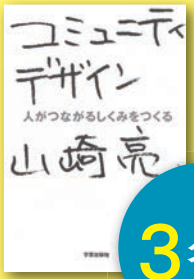
山崎　そうですね。それ以前のコミュニティは乗り越えるべき存在。封建社会の名残り・しがらみであって、なんとかコミュニティの縛りをなくそうとしていたんです。ところが、70年代くらいから都市化がすすみ、人と人のつながりが希薄になり、問題が顕在化してきた。で、やはりコミュニティって大事だよねということになりました。そこで、それまで農村で培われたつながりを都会に持ち込もうと、都市にも自治会のように土地でつながる「地縁型」コミュニティがつくられました。さらにもうひとつ、アソシエーションといえる共通の興味や趣味などでつながる「テーマ型」のコミュニティもつくられました。

堀脇　近頃では自治会の機能も弱まり、「地縁型」コミュニティは疲弊している印象を受けます。

山崎　テーマ型のコミュニティを地域で育てることで、地縁型コミュニティを活性化させたり、地縁型とテーマ型の2つのコミュニティをうまく組み合わせる。こうして豊かな「人のつながり」をつくっていくことが、コミュニティデザインにとって大切なことなんです。

山崎 亮さんの
サイン入り著書を
プレゼント！

『人がつながるしくみをつくる
コミュニティデザイン』
学芸出版社



3名様

本誌綴じ込みハガキにてご応募ください。

地域活動の実践を積み重ねて

堀脇　共通の興味や趣味などで集まれるサークル活動を支援している医療福祉生協もあります。

山崎　それは非常にいいことですね。環境や福祉などに興味を持っている人たちが集まり、自立的にマネジメントしていくサークル活動は、まさにテーマ型コミュニティです。そうした活動を、生協側からどうサポートするかですね。活動費などの支援とともに、活動そのものをどううまくマネジメントしていくか。そして、サークルをつくり、いきいきと活動していることの価値を、生協側がどのように地域に発信していくか。組合員自身もまた、生協活動を自分たちでいかに評価していくかも大切ですね。

　特に生協の中でも、医療や福祉といった健康づくり活動にとりくんでいる医療福祉生協であればこそ、自分たちの存在する意義をいかに地域に示していくかが重要です。地域に向けて広告をうって、理解や興味を求めるのではなく、地域のみんなといっしょに笑顔で活動する。実践を積み重ねていく。普段は来ているのに、最近顔を見ない人がいたら、「最近あの人来ないけど、大丈夫かな」「何か困っていないだろうか」といえる親密な人間関係をつくっておくこと。それが医療福祉生協への信頼につながる気がします。

　地域に向けたスタンスが「医療や福祉で困ったことがあったら、生協の門をたたいてください」では、人びとはなかなか生協に足を運んでくれません。普段から地域のコミュニティにかかわり、健康のために生協はこういう活動をやっていますと、ちゃんと伝えていく。普段から健康づくり活動にとりくんでいる生協の人たちが身近にいたら、自分の親や友達に何かあった時、医療や福祉のことはその人たちにちょっと相談してみよう、という話にもなると思うんです。

堀脇　その通りですね。地域の人たちの生活に、生協がいかに貢献していくか、ということですね。

コミュニティデザインという仕事がない社会を

堀脇　最後に、山崎さんの今後の夢を聞かせていただけますか。

山崎　コミュニティデザインという仕事が、この世の中からなくなることが夢です。専門家が地域の外から入っていって、コミュニティをつくらなければならない日本社会の現状は、どこか疲弊しているんですよね。マッキーバーがいったとおり、コミュニティは自然発生してくるのが理想だと思うんです。ところが、それができない社会のしくみになっている。放っておけば、つながりがさらに薄れていく状態です。社会システムがもう一度変わって、然るべきつながりが自然に生まれてくる世の中になってほしい。そうすれば、コミュニティデザイナーが外から入っていって、つながりをつくって帰るという仕事は必要がなくなります。対処療法的に一つひとつコミュニティをつくっていくだけでなく、違う社会のしくみづくりにとりくむ。それを実現するのは、政治かもしれないし、教育かもしれない。いずれにしろ、コミュニティデザインを世の中からなくすことが夢です。

堀脇　逆説的で、すごく深い言葉ですね。新たな社会のしくみづくりは、私たちの生き方も問われているような気がします。今日はたくさんのヒントと気づきをいただくことができました。ありがとうございました。